

『源氏物語』における「三方面への敬語」

藁 谷 隆 純

一、はじめに

我が古代敬語の特徴の一つとして、「二方面への敬語」が大変有名である。これは現代敬語ではほとんど見られないが、『源氏物語』のような貴人中心の古典には、常に中心的に用いられている。

ところで、複雑に最高に発達した敬語法の見られる敬語物語たる『源氏物語』には、筆者が言う所の「三方面への敬語」が、数は少ないが垣間見られるようである。これは現代敬語には絶えて見られないものである。

そこで、我が古代敬語法考察の一環として、『源氏物語』における「三方面への敬語」に付き、以下、少しく考察して行きたい。

二、「まかでさせ（・まゐらせ）たてまつり給ふ」

『源氏物語』の「三方面への敬語」には、次の二種類が見られるようである。

〔I〕使役「（さ）せ」を含むもの

A、まかでさせたてまつり給ふ

①……「桐壺更衣ハ」日々におもひ給ひて、たゞ五六日の程に、いと弱うなれば、母君、泣くく奏して、
「桐更ヲ」作桐壺 まかでさせたてまつり給ふ（桐壺、P30）作母

この一文節「まかでさせたてまつり給ふ」は、作者（又は、語り手）⁽²⁾から、桐壺帝（「まかで」）、桐壺更衣（「たてまつり」）、桐壺更衣の母（「給ふ」）の、三者への敬語であろう（使役「させ」を介入させて）。仮に、右文末の「給ふ」を桐壺帝への敬語と解すると、敬語は三語あっても二方面への敬語となってしまうが（「まかで」「給ふ」が桐壺帝へ、「たてまつり」が桐壺更衣へ）、①のすぐ後に出て来る次の例の如く、桐壺帝と桐壺更衣とは身分的に懸隔が大きす

ざる故、その反映で敬語的にも対等にはならないのである。

○……「今日、はじむべき祈りども、さるべき人／＼うけ給はれる、今宵より」と、「使方」きこえ、いそがせば、「桐壺帝ハ」わりなく思ほしながら、「桐壺更衣ヲ、里ニ」まかでさせ給ふ。(桐壺、P 31)

この「まかでさせ給ふ」は、「させ」は使役、「まかで」「給ふ」の二敬語はいずれも作者より桐壺帝への敬語であり、いわば一方面への敬語となる。仮に「まかでさせたてまつり給ふ」などと、桐壺更衣への敬語「たてまつり」等を入れると、桐壺更衣と桐壺帝が同格となり、それは桐壺帝へ大変失礼になってしまう訳である。

ところが①は、母と桐壺更衣とはほぼ対等と言えようから、「……たてまつり給ふ」と記せると思われる。

さて、この三方面への敬語「まかでさせたてまつり給ふ」を、諸注釈書等はどうに現代語訳しているか、いくつか見たい。

(ア)母君が、退出させ申しなさる。(「奉り」は、文中には

省略した「更衣を」に対する尊敬。)(旧大系)

右の訳注は、共に完全に良いと思われる。

(イ)お里さがりをおさせなさる。(「たてまつり」は母君がら更衣に対する敬語。)(評釈)

(ウ)退出おさせ申し上げなさる。(「たてまつり」は、娘で

あるが帝の妃なので、母君から更衣を敬っている。)

(集成)

右の(イ)(ウ)につき、訳の方は良いようだが、注の方の「母君から」というのは如何であろうか。確かに謙譲語の意味用法は諸説あるようだが、本稿では、「地の文においては、作者(又は、語り手)から、動作の受手への敬語」説に従いたい。すると、(イ)(ウ)の「たてまつり」は、「母君から」ではなくして、「作者(又は、語り手)から」更衣への敬語となろう。

(エ)お里へ下がるお許しをいただきました。(寂聴源氏)

右は、もっぱら帝へのみ敬語で、桐壺更衣・母への敬語は、全く訳出されていないようである。それは、現代作家によるもの故、原文に忠実な訳というよりは、原文を踏まえつつ一つの創作という点にあるのだろう。

(オ)退出するようにお取り計らいになる。(全集)

(カ)里にお退らせになる。(完訳日本の古典)

右の(オ)(カ)はいずれも、帝・母への敬語はあるが、更衣への敬語(謙譲語「たてまつり」。「……申シ上ゲ」等と訳す)が訳出されていない。確かにこのような場合、現代敬語では謙譲語は省略されることが多いとはいえ、作家ならぬ国文学者・国語学者の手による(オ)(カ)の訳は、原文に忠実なる訳とは言い難からう(意識したのかもしれない)。ここで、

現代語訳とは何なのか、理想的現代語訳とは何か、ということの問題提起しておきたい。

②……と「内大臣ハ」の給ひて、作→冷帝にはかに、「娘の弘徽殿女御ヲ、冷泉帝ノ元カラ」作→弘徽殿女御まかでさせたまつり給ふ。作→内大臣（乙女、P 300）

これも「まかでさせ給ふ」等とは書けぬのだろう。内大臣の娘という点からは弘徽殿女御は内大臣より目下かもしれないが、帝（冷泉）に仕える「女御」という点からは、少なくとも父内大臣と同等にはなろうか。故に、内大臣を主語とする右文においては、女御への「たてまつり」は省けない訳であろう。そこで、三方面への敬語表現になったものと思われる。

③その夜さりなむ、宮まかでさせたまつりたまひける。作→帝
作→女二宮
作→薫

（宿木、『集成』P 255）

『集成』傍注↓「薫は」女二の宮を退出させ申し上げなさった。

『評釈』も、

そのよさりなむ、宮まかでさせたまつりたまひける、の本文で、

女二の宮を宮中から退出おさせ申し上げなさった。と訳している。

しかし、旧『大系』は、

その夜さりなむ、宮、まかでさせ給ひける。との本文で、頭注一五にて、

女二の宮を、薫は、自邸なる三条院に退出させなさるのであったつけ。

と訳すのだが、女三の宮へ原文で敬語がない。皇女ゆえ女二の宮の方が、少なくとも薫より身分的には上位と思われるのに、薫へのみ敬語（「給ひ」）、女二の宮へ無敬語というのは、解せない。直後にも、

○かくて、心安く、うち解けて、みたてまつり給ふに、

（宿木、P 119）

と、女二の宮へ作者は敬語（「たてまつり」）を省いてはいないのである。少なくとも、女二の宮と薫とは対等の待遇になっている。

よって、本文校訂は、『集成』『評釈』等の底本の方が、女二の宮への「たてまつり」を含む故、「たてまつり」のない『大系』等よりも善い本文と言えようか。

以上、三方面への敬語「まかでさせたまつり給ふ」は三例であった。次に、「まゐらせたまつり給ふ」を見たい。

B、まゐらせたまつり給ふ

④又、見たてまつらでしばしもあらむは、いと後めたうおもひきこえ給ひて、すがくとも、〔内裏二〕え

作→桐帝 作→源 作→母
まゐらせたてまつり給はぬなりけり。(桐壺、P 39)

右でも、省略された目的語たる源氏への敬語「たてまつり」は決して省けないものである(故桐壺更衣の母へ敬語「給は」を用いたからには)。

⑤侍ふ人く、御後見たち、御兄の兵部卿の親王など、
……(四宮→藤壺ヲ)まゐらせたてまつり給へり。(桐壺、P 46)
作→帝 作→藤壺 作→御兄ナド

⑥(藤壺)「……(朱雀)院にも、おぼさん事は、げに、かたじけなう、いとほしかるべけれど、かの(六条御息所ノ)御遺言をかこちて、知らずがほにまゐらせたてまつり給へかし。……」(滯標、P 132)
藤→斎宮 藤→源 藤→冷帝

これは、会話文(藤壺の)における三方面への敬語であろう。「たてまつり」は、冷泉帝へではなくして、書かれざる目的語の斎宮(故六条御息所ノ遺児タル娘)への敬語である。

⑦……(鬚黒)大將は、……思ひかへして、年かへりて、
(玉鬘ヲ、内裏ニ)まゐらせたてまつり給ふ。(真木柱、P 142)
作→冷帝 作→玉鬘 作→鬚黒

右も、「まゐらせ」と切って一語なのではなからう。ふつう謙譲語と謙譲語(本動詞・補助動詞共に)は直接は重なりにくいからである(助動詞「(さ)す」等は、「(聞こえ)さす」等と重なるが)。

⑧……おほきさい(弘徽殿太后)の、内侍の督(かみ)「(妹ノ臘月夜)を、(朱雀帝ニ)まゐらせたてまつり給ひて、……(若菜上、P 211)
作→冷帝 作→臘月夜 作→太后

これも、弘徽殿太后の妹ではあるが、冷泉帝の愛を受ける貴女の臘月夜に対して、謙譲語「たてまつり」を省く訳には行かないのである。右の「たてまつり」は朱雀帝への敬語ではない。朱雀帝へは、既に「まゐら」によって敬意を示している。敬意を示すべき三人めの人物即ち目的語たる「臘月夜」への敬語、それが「たてまつり」なのである。

⑨……と、(按察大納言ハ)おぼし立ちて、「娘ノ大君ヲ」まゐらせたてまつり給ふ。(紅梅、P 236)
作→春宮 作→大君 作→按大

『大系』注一五……大君を、春宮にさしあげ(参らせ)申しなされる。「たてまつり」は、省略した補語である「春宮」の敬語。

右注は、次の二点において、問題がある。先ず一点目は、原文「まゐらせ」を一語と解し、「サシアゲ」と訳しているようだが、しかし、一文節中において、謙譲の本動詞に謙譲の補助動詞が直接に下接することはほとんどないと思われるので、ここは「まゐらせ(使役)」と二語であり、「参上サセ」と使役の意を入れて訳すべきであろう。次に二点目は、大君への敬語が訳出されていない。按察大納言よりは娘なので目下であつても、貴人同士へはそれぞれ

れに敬語を用いるべきである。「まゐら」により春宮へは敬意を表わされているので、この「たてまつり」は省略された目的語「大君」への敬語であり、やはり三方面敬語と思われる。

『評釈』は、「参内させ申し上げなさる。」と訳し、従いたい。『全集』は、「東宮に参上させなさる。」又、『集成』も、「大君を東宮に参上させなさることにした。」と訳し、それぞれ大君への敬意（「たてまつり」の訳「申し上げ」）のみが訳出されてなく、意識したのかもしれないが、忠実な訳とは言い難いわけである。

⑩……と、「按察大納言ハ、春日ノ神ヲ」心のうちに祈りて、作→春宮「大君ヲ」作→大君まゐらせたてまつり給うつ。作→按大

（紅梅、P 237）

『大系』注三一→大君をさしあげ（参らせ）申しなされてしまった。これを麗景殿女御と言った。

右も同じで、「さしあげ」の所、「参上させ」とでも使役の意を出せば忠実な訳になろう。『全集』は、これ又、「東宮におさしあげになられた。」と訳しており、そこには、使役の意、大君への敬意、いずれも訳出されていない。『評釈』は、「入内おさせ申し上げなさった。」と訳し、従えよう。

以上が、三方面への敬語の、「まかでさせ（まゐらせ）」

給ふ」のパターンであり、「まかでさせ給ふ」三例、「まゐらせ給ふ」七例と、『源氏物語』においては、後者の方がおよそ二倍多かった訳である。

三、複合動詞を含むもの

〔Ⅱ〕複合動詞を含むもの

⑪との「源氏」は、この西のたい「花散里」にぞ、作→花散「夕霧ヲ」作→夕霧きこえ預けたてまつり給ひける。作→源（乙女、P 313）

右を、「……西のたいにぞきこえ、預けたてまつり給ひ……」と切る解釈もあり得よう。その場合は、三方面ではなく二方面への敬語（「たてまつり給ひ」となる。しかし、そうすると、謙譲語「たてまつり」の敬意の対象が、(1)花散里、(2)夕霧、(3)花散里・夕霧、のいずれか、定かでないこととなろう。⑩で仮に「きこえ」がないとすると、謙譲語は「たてまつり」のみとなり、その「たてまつり」は、夕霧へとも、花散里へとも、夕霧・花散里へとも考えられ、確かに敬意の対象が明確ではない（一般に古代謙譲語においては、そのような敬意の対象へAさんか、Bさんか、A・Bさんか）が問題となるのが少なくないのだが）。

右では、それを避けて、本動詞「預け」の前に「言ふ」の謙譲語「きこえ」を入れて複合動詞「きこえ預け」（こ

ここでは「言ひ預け」の受手敬語と解したい」とし、それは直前の「西の対」「花散里」に」を受けるのだから、「きこえ預け」は花散里への敬語たるが明確となろう（夕霧へとは考え難い）。従って、下の「たてまつり」の方が、明らかに目的語「夕霧（ヲ）」への敬語と思われ、分り易くなる効果があるう。よって、いわゆる三方面への敬語と考えたい。この場合は、「工」のパターンで見たような使役「（さ）せ」の介入ではなくして、

謙讓語十《普通語》十謙讓語十尊敬語

の順で、敬語が三つ重ねられる。但し、謙讓語に謙讓語は直接下接しにくいので、いわば本動詞（普通語）を挟んで、本動詞の上に謙讓語を置き複合動詞として、スムーズに接続させているものであろう。

因みに、あまたの古語辞典等では、余り「きこえあづく」を見出し語として立てていないようだが、例えば、講談社『古語辞典』では、次の如く述べている。

きこえあづく（他下二）「言ひ預く」の対象尊敬語

お頼み申し上げて預ける。……

それから、次の二例も参考になろう。

○……「源氏ハ、紫上ガ」しろしめすべき様ども、「少

納言ニ」のたまひ預く。（須磨、P 23）、

右につき『評釈』（P 49）は、

宣たまひあづく↓「言ひあづく」の為手尊敬。主語は源氏。受手尊敬でないから補語は少納言。

と注し、

……（少納言に）教えてお預けになる。

と訳している。

○「京へノ」御渡りに、有（る）べき事ども、人々「女房達」に、「薫ハ」のたまひおく。この宿守に、かの鬚がちの宿直人などは、「残りテ」さぶらふべければ、このわたりの、近き御庄どもなどに、その事ども、の給ひあづけなど、まめやかなる事どもをさへ、定め置きたまふ。（早蕨、P 20）

これらより、複合動詞「言ひ預く」における次の表ができあがろう。

のたまひ預く	言ひ預く	きこえ預く
（為手尊敬）	（非敬語）	（受手尊敬）

そして、右の表は、多くの複合動詞にも当てはまるわけである。

参考的に、「言ひ知らす」(複合動詞)につき見てみよう。

○(大君)「……〔女房達ガ〕聞きにくきさまで、〔御身

二〕いひ知らすめれば、……」(総角、P 420)

○(薫) 秋霧の晴れぬ雲井にいとしくこの世をかりといひ知らすらむ(椎本、P 365)

○〔姫君ヲ〕いとあはれと、見たてまつり給ひて、〔夕

霧ハ〕「は、君〔雲井雁〕の御教へに、なかなかひ給

うそ。〔母君ノ如ク〕いと心憂く、思ひとる方なき心

あるは、いと、あしきわざなり」と、〔姫君二〕いひ

知らせたてまつり給ふ。(夕霧、P 166)

○をとこ〔夕霧〕は、よろづに思し知るべき〔世ノ〕

ことわりを、〔落葉宮二〕聞え知らせ、言の葉多う、

あはれにも、をかしうも、聞え尽くし給へど、「つらく、

心づきなし」とのみ、〔落葉宮ハ〕思いたり。(夕霧、

P 160)

例えば、『評釈』(P 464)は、右の「きこえ知らせ」を、

「言ひ知らす」の受手尊敬、としている。

○〔薫ノ〕思ひしやうに、優婆塞ながら行ふ山の深き心、

法文など、わざと、さかしげにはあらで、〔八宮ハ、

薫二〕いと、よく、の給ひ知らす。(橋姫、P 309)

○〔薫ハ〕「……〔京ノ〕さるべき所に、〔大君ヲ〕移ろ

はしたてまつらん」など、〔弁達二〕きこえおきて、

阿闍梨にも、御祈り、心に入るべく、の給ひ知らせて、
出で給ひぬ。

右を、例えば『大系』は、「御祈念を熱心にするように

言ひ知らせ(命じ)て……」と、無敬語で訳しているが、

「の給ひ」は尊敬語ゆえ、「言ひ知らせ(命じ)なさって」

等と訳した方が、原文により忠実な訳となろう。

辞書では、例えば、講談社『古語辞典』は、

いひしらす「言ひ知らす」 話し聞かせる。告げ知ら

せる。「いとよく―せ給ふ」(源・帚木)

『古語林』も、

いひしらす「言ひ知らす」(他サ下二)話して知らせる。

例聞かまほしうして、言ひしらせぬをば怨みんじ

〈枕・にくきもの〉

きこえしらす「聞こえ知らす」(他サ下二)〔謙讓語〕

ご説明申し上げる。言い聞かせ申し上げる。例僧都、

世の常なき御物語、後の世のことなど聞こえしらせ

給ふ(源氏・若紫) ☆動詞「きこゆ」の連用形「き

こえ」にラ行四段活用動詞「しる」の未然形「しら

が付いた「きこえしら」に、使役の助動詞「す」が

付いて一語になった語。「聞こゆ」は「言ふ」の謙

讓語。

と、いずれも複合動詞に扱っている。又、現代の『日本国

語大辞典』(小学館)は、

いいしらせる「言知」(他 下二)

図いひしらす(他 下二)

言つて知らせる。話して聞かせる。告げる。*土左
……「……このことは伝へたる人にいひしらせけ
れば……」…… (波線、筆者)

右では、古代語「言ひ知らす」、その現代語「言い知らせる」いずれも一単語(品詞)として、複合動詞に解している。前述した如く、ここではそれらに従いたい。さて、以上よりして、「言ひ知らす」関係についても、次のような表ができるであろう。

言ひ知らす	のたまひ知らす	(為手尊敬)
←	→	
きこえ知らす		(受手尊敬)

四、おわりに

現代敬語は、ほとんどが一方面への敬語である。例えば、貴人が貴人に会う場合等もそうである。

○紀子さまが、雅子さまにお会いになる。

○皇太子さまが、天皇陛下にお会いになる。

「お会い申し上げになる」等と、回りくどく受手尊敬の謙譲語「申シ上ゲル」等は余り入れないのが普通であろう。しかし、古代敬語では、そうは行かない。

古代敬語は、「一方面への敬語」も勿論多いが、そこに貴人の受手がかわる場合の「二方面への敬語」が非常に多い。

〔源氏、紫上二〕聞こえ給ふ。

その「二方面への敬語」こそは、古代敬語を特徴づけるものの一つと言えよう。そして、本稿で見て来た如く、更に、一文節中の「三方面への敬語」までが、『源氏物語』には複数見られるということである。

○……と、紫の上も、の給ひて、わか宮〔ヲ〕、〔春宮方二〕しのびて参らせたてまつらんの御心づかひし給ふ。
(若菜上、P 291)

右で、「参らせたてまつら」は二方面への敬語だが、仮に「んの御心づかひし」を省けば、「参らせたてまつり給ふ」となり、いわゆる三方面への敬語となる訳である。

また、敬語が三つ重なっている(使役「(さ)せ」等を挟んで)からといって、常に三方面への敬語とは限らない。

○……御四十九日すぐるまゝに、〔今上ハ〕忍びて、

作↓今上作↓女二宮 作↓今作↓今上
参らせたてまつらせ給へり。(宿木、P 34)

右の一文節「参らせたてまつらせ給へり」には、敬語は四つもあるが(上の「せ」のみ、使役)、しかし、「たてまつら」が女二宮への敬語であるのは、「参ら」・(下の)「せ」・「給へ」の三語はいずれも今上への敬語と思われるので、結局ここは二方面への敬語となる。

○「薫ハ」夜もすがら、人「女房」をそ、のかして、
御湯など、「大君ニ」作↓大君 作↓大君 作↓薫まゐらせたてまつり給へど、「大君ハ」露ばかり参る気色もなし。(総角、P 456)

謙譲語は謙譲語に直接続きにくいとすれば、右の「まゐらせ」は一語ではなく、「せ」が使役、「まゐら」が謙譲語となるうか。すなわち、下の「たてまつり」と共に、この一文節においては、大君へ「まゐら」「たてまつり」と敬語が二つも用いられている。敬語数は三つだが、これも「二方面への敬語」なので、注意したい。

ともあれ、「誰ガ、誰ニ、誰ヲ、……スル」のような構文において、その三貴人すべてに同時に敬意を表したいという必要性より、「三方面への敬語」は生まれたと言える(使役「(さ)せ」を介入させたり、若しくは、複合動詞を含んだりして)。そして、その際の主語に、帝や中宮級の最高級の人物は来ないようである(帝・中宮等が主語の場合は、謙譲語「たてまつり」が入りにくく、従って、

「三方面への敬語」には成り難い訳である)。

以上、『源氏物語』における「三方面への敬語」につき簡単に見て来たが、同じ中古の他の作品における、そして、中世以降の作品における「三方面への敬語」等の考究については、今後の課題としたい。

注

- (1) 本文は、原則として、岩波『日本古典文学大系』本による。漢字は、新字体に改めた。尚、本文中の「」内は、筆者が補った(『大系』注も参考にした)。
- (2) 地の文における敬意の主体は、「作者から」で統一した。
- (3) 玉上琢弥『源氏物語評釈』(角川書店)。
- (4) 石田穰二・清水好子『新潮古典集成』。
- (5) 瀬戸内寂聴『源氏物語』(講談社)。
- (6) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛『日本古典文学全集』(小学館)。
- (7) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男(小学館)。
- (8) 林 巨樹・安藤千鶴子編『古語林』(大修館)。

付記

本稿の一部については、平成九年四月二十五日(金)創価大学・日本語日本文学科の「日文懇話会」において、口頭発表した。

(わらがい・たかすみ、本学 教授)